

# 雑司が谷旧宣教師館だより

第43号

2008年3月15日

豊島区立雑司が谷旧宣教師館

〒171-0032 東京都豊島区雑司が谷1-25-5

TEL/FAX (03) 3985-4081

～地域福祉の先駆者としての宣教師たち～

## 2. アリス・ミラー

前回42号では雑司ヶ谷幼稚園などを開設したリリー・サイパートを紹介しましたが、今回は明治時代の末期に貧しい家庭の子どもたちを対象にした慈善教育や保育活動に取り組み、特に四谷および千駄ヶ谷における地域福祉活動に一生を捧げ、豊島区内雑司ヶ谷霊園に葬られたアリス・ミラーをご紹介します。

宣教師が慈善教育や保育活動を行った背景には、明治時代の中頃になると、経済の発展によって東京へと人口が集中しますが、その一方で雇用体制は十分ではなく、流入人口の大部分はまず都市下層民として市内のスラム（貧民街）に流れこむという状態がありました。

急激な都市化の結果生じた下層社会の広がりには社会問題として関心が持たれ、貧困者の救済が民間の篤志家や宗教団体によってはじめられました。

### 1. 東京のスラムについて

1898（明治31）年、毎日新聞社の記者であった横山源之助は、『日本の下層社会』で東京の貧民の状態について書き、四谷鮫河橋、下谷万年町、芝新網を東京の三大貧窟と呼びました。

イギリスでは、1860年代経済的繁栄のいっぽうで貧困者が増え、慈善組織協会やセツルメント活動など、民間による慈善事業が活発に行われるようになりました。

1892（明治25）年4月、独立宣教師（※1）アズビルは、スコット女史、ホステッター女史、石川角次郎（※2）、マッケレーブ夫妻を伴い来日しました。マッケレーブの自叙伝によれば、ホステッター、スコットそしてマッケレーブ夫妻は四谷大番町42番地（現在の新宿区大京町23-2～3）に二軒の家を借り、活動を開始します。

まもなくスコットを四谷に残し、マッケレーブらは神田（現在の千代田区神田錦町1-14）に教会を開設し、布教活動を開始します。ホステッターは貧困家庭の子どもたちのための慈善学校を教会内に開設しました。

子どもたちは公立学校と同様の授業を受け、ほかに一時間ずつ聖書と歌を習うというものでした。少女たちの中には裁縫を習う者もあったということです。

マッケレーブは、「日本政府はこれまで貧困者層に対する教育に価値を認めていなかったが、慈善学校の果たす良い教育結果に着目し、早晚貧しい子どもたちにも教育を受ける機会を設けるだろう。」と自叙伝で述べています。

（※1）宣教師協会等の組織に入らず、行った先で自ら教会を開き、活動資金も集金等で自己調達する。

（※2）栃木県足利市出身。明治女学校、学習院で教鞭をとったのち聖学院の初代校長となる。



### 2. 四谷教会とミラーの来日

四谷に残ったルイス・スコットは、四谷教会を設立しました。組織からの援助を受けることもなく、スコットは貧しい家庭の子どもらを集めて慈善学校を開き、マッケレーブの記録によれば100名もの児童が通っていたということです。

1895（明治28）年、アズビルはケンタッキー州アーリントン出身のアリス・ミラーを四谷教会に派遣し、ミラーはスコットとともに活動を始めます。翌年、スコットは母親の看病のために帰国したため、ミラーは四谷での奉仕活動を引き継ぎました。

アリス・ミラーは1928(昭和3)年に聖路加病院で亡くなるまで、良き協力者となった倉知正猪(まさい)というパイブル・ウーマン(※3)を育て、四谷および千駄ヶ谷で活動しました。

1982(昭和57)年に野村基之氏(※4)は、ミラーの四谷鮫河橋スラムの慈善活動を明らかにするために、倉知正猪に聞き取り調査を行いました。野村氏はその後、聞き取り調査を裏付けるために広範囲にわたる調査を行っています。それらの資料をもとに、ミラーの日本における活動について、

①「四谷教会時代」

②「千駄ヶ谷教会時代」

③「ミラーの死とその後の千駄ヶ谷教会」

の三つに分けてご紹介します。

(※3) 宣教師たちの活動を補佐する役割を果たす女性であり、宣教師自らが女性の養成を行いました。

(※4) 甲斐小泉キリストの教会独立伝道者。昭和30年代アメリカ留学時、野村氏の身元保証人を引き受けたのがマッケレブの長男・ハーディング氏です。アメリカで18世紀後半から19世紀にかけて起きた聖書への復帰運動の研究者。



①四谷教会時代

(1894(明治27)年～1906(明治39)年)

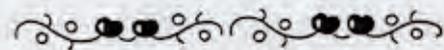
アリス・ミラーはケンタッキーの出身で、アズビルが日本宣教を要請したとき、ミラーは40歳代で小学校の校長でした。

来日後、ミラーは資金確保のために女子高などで英語を教え、時には日に12時間以上教えることもあったようです。収入は奉仕と慈善活動に使われ、自身の生活費は月十ドルにも満たなかったそうです。

ミラーは数人の子どもを自宅に引き取って養育し、その中のひとり(倉知正猪)が信頼のおけるパイブルウーマンに成長しました。

野村氏の調査によれば、倉知正猪は四谷教会の活動を次のように語っています。

「鮫河橋(\*現在の四谷南元町あたり)でミス・ミラー仕事をした。(ミラー先生は)デントン(※5)さんと仲良しで徳永さん(※6)とも助け合った。乞食村に二階屋を二軒借りてやったが、子どもが騒がしくて落ち着かぬ。衣料も寝具も与えたが酒代にかわった。デントンさんと京都に行ったことがある。カニングハム(※7)が来るようになってからうまくいかなくなる。私はミラー先生ほどではなかったが幼稚園のお手伝いをした。他に二人の女性がいた。場所が広がったので二部においてやっていた。その頃は人を集めようとする子どもばかり集まったものだ。新宿の恐ろしい所でも15銭だして集会をやり、子どもたちのための奉仕をやった。ミス・ワイリック(※8)も知っている。ワイリック先生は人とあまり交わらないが親切で一生賢明働いていた。ミラー先生とは仲良くやっていた。」



この倉知正猪の証言から、鮫河橋におけるミラーらの活動内容と他の慈善団体との関りについて、

1. ミラーらが鮫河橋において保育活動(幼稚園)を行ったこと。幼稚園は二クラスで、保母が二人いたこと。
  2. 二葉幼稚園創設に貢献したデントン女史とミラーが協力関係の状態にあったこと。
  3. 二葉幼稚園の保母となる徳永<sup>ゆき</sup>とも協力関係の状態にあったこと。
  4. ワイリック女史との協力関係の存在したこと。
- 以上4点が明らかになりました。

(※5) アメリカ・ネバダ州出身のアメリカン・ボード宣教師。同志社女子部で教えた。

(※6) 徳永<sup>ゆき</sup>。二葉幼稚園(新宿区南元町四番地)前園長。二葉幼稚園は1900(明治33)年、野口幽香、森島美根の二人の華族女学校付属幼稚園保母によって創設された貧困家庭の子どものための幼稚園であり、日本の保育事業の先駆けをなすもので、1906(明治36)年に四谷鮫河橋(現在地)に移転している。

(※7) アメリカ・ペンシルベニア州出身。アズビルの要請によりミラーから四谷教会を引き継ぐ。

(※8) アメリカ・アイオワ州出身。ディサイプル派の宣教師。日露戦争の時負傷兵の慰問を行い、東洋のナイチンゲールと呼ばれ、明治天皇から銀杯が贈られた。

倉知身とミラーとの関係については、  
「ミラー先生は自分が子どもの頃に、暖かいので高知に年に一度訪ねてこられたので知り合い、先生の援助で女子学院に入学した。」と語っています。

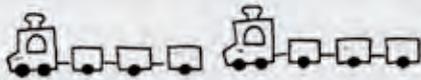
ミラーについては、

「ミラー先生は日本が大好きであった。日本食でも刺身と納豆は食べなかった。ミラー先生の日本語の先生は男だったので男言葉で、私には英語で話せと英語だけを使った。日本人が洋服を着ると似合わぬと言って嫌がり、私はいつも和服だった。ワイリック先生は大きな人だったが、ミラー先生は小さな人だった。」と語っています。

## ②千駄ヶ谷時代

1906(明治39)年～1928(昭和3)年

1906(明治39)年、ミラーは活動の拠点を千駄ヶ谷(45)に移します。ミラーはそこで貧しい人ために授産を行い、それで二階建ての授産所を入手し改築して教会にしました。千駄ヶ谷市場の隣で明治神宮の入り口のあたりでした。ミラーがそこを選んだ理由と千駄ヶ谷教会について、



「千駄ヶ谷のあたりが貧民窟であって、そのところでミラー先生が働きたかったとか聞いていた。我々はミラー先生が亡くなるちょっと前から行きだした。市場の前だった。植木屋の隣で市場の向かい側だった。70～80人入ればぎっしりだろう。会員は30人前後だった。建物は倒れかかっているつかえ棒がしてあった。ミラー先生の死後、外国人はめったに来なかった。時には誰かがきていた。オルガンがあり、オルガンは倉知さんが弾いていた。(中略)ミラー先生は庭に植木や草花を植えていた。土地は借地で建物は何処かで入手して移築したもので、粗末なものだった。」

と、千駄ヶ谷の教会に通っていた大畑浩二氏は語っています。

## ③ミラーと死とその後の千駄ヶ谷教会

1928(昭和3)年、ミラーはインフルエンザをこじらせ肺炎を起こし亡くなりました。倉知はミラーの死について、次のように語ります。

「先生の昇天日に大雪が降った。病院で死体は置いておけんで引き取ってくれといわれたが、大雪だったので奥村先生と二人で築地から左門町まで徒歩で戻った。夜明けに着いた。葬式にカニングハムは頼まなかった。奥村貞友先生がやってくれた。スラムの人が随分助けて式を出した。鮫河橋の子どもたちはミラー先生をたいそう慕っていたので大勢きてくれた。鮫河橋の大人の人が来たかどうか覚えていない。ミラー先生の身内の人は、誰も来なかった。連絡もなかった。雑司ヶ谷墓地のミラー先生の墓碑はミラー先生の姪が送金してくださったので建立できた。」



ミラーの死について、『クリスチャンスタンダード紙』1928年6月号は、業績をたたえる記事を掲載しています。

「東京で活動していた独立宣教師のアリス・ミラーはインフルエンザで死亡した。(中略)東京で大地震が起きた時、ミラーは倒壊した粗末な自宅裏に避難し、しばらくの間、日本人使用人が作ったむしろ小屋で暮らしていた。ミラーの姉妹は日本人の同志、ミス・倉知とともに帰国するように説得したが、ミラーは日本での奉仕活動をこのまま続けたい、とりわけ子供たちが残って欲しいと訴えているとして帰国を拒んだ。

ミラーは日本の有名な作家・巖本嘉志と親しかった。ミラーは大震災ですべてを失い、四谷ミッションも貧しい子どものための慈善学校も他の宣教師に譲渡する結果となった。

最後にミラーは雑司ヶ谷(\*千駄ヶ谷の間違い)の近くに施設を建てた。一階は浸礼台を備えた教会堂と二つの教室、陰に小さな台所と食堂があった。倉知はこの教会について、『どこからの支援もなく教会員が運営し、日本にもっとも根付いた教会である』と述べている。」

この記事にある巖本嘉志とは、明治女学校校長・巖本善治の妻で『小公子』の翻訳者・若松賤子(しずこ)です。明治女学校はキリスト教主義の学校であり、1894(明治27)年～1896(明治29)年にはマッカーレブと共に帰国した石川角次郎が同校で教えています。

その頃の四谷教会の名義人は、石川角次郎となっていました。1899(明治32)年6月に、上野不忍池湖畔で写された記念写真に、ミラーは石川角次郎や女子聖学院創始者であるバーサ・クローソンらと共に写っています。

しかも、若松賤子は1891(明治24)年から一番町教会の会員であり、英文雑誌『JAPAN EVANGELIST』の婦人・子ども欄の編集に携わっています。1895(明治28)年にはデントン女史も一番町教会で活動を行っており、ミラーとデントンそして巖本嘉志の接触の可能性はきわめて高いといえますが、直接の関係を裏付ける資料は見つかっていません。



### 3. 千駄ヶ谷教会の閉鎖

千駄ヶ谷教会は戦争中、鉄道線路をまもるために取壊しになりました。その後教会は閉鎖されますが、具体的な時期は把握出来ていません。

ミラーは亡くなるまでの33年間を、日本での奉仕活動に費やしました。ミラーは活動記録を残していません。マッケレーブの自叙伝『かつて私が歩いた道』や、アメリカの宣教活動資料そして野村氏の詳細な調査記録により、ミラーらの実践した地域福祉活動とそれらを支えた人々との協力関係が明らかになりつつあります。

### 4. ミラーの業績

「鮫河橋でミス・ミラーは仕事をした。(中略) 乞食村に二階屋を二軒借りてやった」、という倉知正猪の証言する二階屋の場所は特定することはできませんでした。

またきわめて身近な地域で同様の活動を行ってきた二葉幼稚園と、ミラーやマッケレーブら独立宣教師との関りを示す資料も見つかっていません。

しかし倉知が証言したように、ミラーがデントン女史そして徳永恕らと協力し合いながら、四谷鮫河

橋スラムの中で、貧しい家庭の子どもらの保育活動を行ったことは、まさに野口幽香と森島美根による二葉幼稚園設立の目的と通じるものがあります。

マッケレーブは慈善学校の内容についてある程度具体的に書いていますが、保育内容については触れておらず不明です。また、女性宣教師たちは行き場のない子どもたちを自宅に引き取り、養育することもありました。

学制施行後も貧困ゆえに、教育の機会から取り残されていたスラムの子どもたちに対しての慈善教育と保育活動と、その結果生じる母親の就労時間の確保という点で宣教師たちの果たした役割は、地域の近代化と福祉の向上を担っていたという点で重要です。



豊島区内には留岡幸助の「家庭学校」や丸山ちよの「巣鴨託児所」など、日本の社会福祉事業の草分けとなった施設が明治・大正時代に創設され、昭和初期には雑司が谷に更正施設の東京聖労院や聖労母子ホームが移ってきました。

福祉という考え方が広く浸透しない時代に、言葉と文化の違いそして経済的困難を乗り越えて社会改良に努め、地域の人々が必要とした援助活動を実践した宣教師のひとり、アリス・ミラーの墓は雑司ヶ谷霊園一種6号一側9番にあり、名義は倉知正猪となっています。

#### 参考文献

- 『日本の下層階級』横山源之助著 1898年  
『光ほのかなれども』—二葉幼稚園と徳永恕—  
上 笙一郎・山崎朋子著 1995年  
「先覚者紹介」野村基之著 『福音誌』1981年～

※ アリス・ミラーの活動詳細は、豊島区立郷土資料館研究紀要『生活と文化』16号 2007年3月1日発行に掲載されています。

【編集後記】江戸時代は鬼子母神信仰で賑わい、明治・大正・昭和には東京の新興住宅地として多くの文化人が住まった雑司が谷。東京メトロ13号線も間もなく開通します。雑司が谷の重層的な魅力を探访してみたいかがでしょうか。(文責・浜地)